

氏名（本籍）	ヤマ シタ タカシ 山下 岳（山梨県）
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第166号
学位授与年月日	平成18年3月24日
学位論文等題目	〈作品〉ウドュー 〈論文〉陶と幾何学模様的美

論文等審査委員

（主査）	東京芸術大学	教授	（美術学部）	島田文雄
（論文第1副査）	〃	助教授	（ 〃 ）	佐藤道信
（作品第1副査）	〃	教授	（ 〃 ）	増村紀一郎
（副査）	〃	〃	（ 〃 ）	橋本明夫
（ 〃 ）	〃	助教授	（ 〃 ）	豊福誠
（ 〃 ）	東京国立近代美術館	工芸課長		金子賢治

（論文内容の要旨）

序論にて、1999年に行われた富士山でのイベントで、夜通し踊る最中体験した、不思議な出来事と、その時の富士の神秘的な情景を、私が幾何学文様や神秘などに惹かれていく事となったきっかけとして書いています。

焼き物と幾何学文様的美が表れている縄文土器に、深い感動を与えられることから、土台に揺ぎ無い秩序を持つ幾何学文様と、腐食しない性質の陶をかけ合わせた作品が持つ、数千年後の人々に感動を与えられる可能性についてを、第一章「陶と幾何学文様の可能性」として、一節にまとめました。

第二章は「幾何学文様的美」とし、第一節に、伝統的なものから、フラクタル幾何学による新しいものまで、さまざまな幾何学文様の紹介。また、それらが持つ「無限」や「理性」を引き合いに、幾何学文様に感ずる美と、自然に対して感ずる美には共通性があることの説明。そして、幾何学文様の芸術性の高さについて。第二節は、雪の結晶、ひまわりの螺旋、樹木のフラクタルなど、自然の中に存在する様々な幾何学文様から学び取ることができる、様々な美のヒントについて。螺旋については、具体的な描き方の解説もしています。第三節は、私が幼少時代の頃に特に騒がれていて、また現在でも数多く出現する、ミステリーサークルの持つ神秘的な美と、何かを誘発させる力。そしてその芸術性について。また、そこに気付かされる、幾何学文様の持つ、宇宙的感覚や、人間以外の知性を感じさせる力について書いています。

第三章は「焼き物と幾何学文様」とし、第一節には、数千から一万年以上も昔に縄文人が表した、焼き物と幾何学文様的美の傑作である、縄文土器の持つ様々な美の要素を、形、文様、見せ場、疎密バランス等に焦点をおき、私なりの見解を述べました。そして、そこに足りないと感じている要素として、重厚感や完成度のある質感の美をあげています。第二節は、縄文土器に足りないと感じている質感の美に関しての、私なりの解決方法として、磁器や陶器質を用いる方法と、黒陶などのように磨きを入れる方法の、二通りを説明しています。第三節は、現在のアートシーンからは、切っても切りはなせない存在となっている、素晴らしいデジタル芸術であるComputer Graphicsを、伝統的なアナログ芸術である陶芸に繋げるべくして、私がしばしば利用している転写技法の作業工程の説明。そして転写技法の持つ様々な利点と、現在の問題点。利点には、手描きでは困難な精密な文様を描くことが可能な点と、目の前で微妙な色の調整が出来る点をあげ、問題点には、焼成温度の低さからくる耐久性の問題をあげています。

第四章は「私の作品」とし、第一節には、私がなぜ陶芸をするのか。私が陶芸をどのように捉え、ど

う向き合って制作しているかという、私の陶芸観。また、器に対して私が抱える問題についての説明。そして過去の三点の作品のおおまかな内容説明と、それぞれの心境の変化について書いています。第二節は、私がなぜ作品を作るのかと、今回制作した「ウドゥー」についての内容説明及びウドゥーとの出会い。そしてその製作意図。第三節は、私が行なっている主な焼成方法である、「還元」「還元落とし」の焼成工程及び、狙いの説明。そして「ウドゥー」の制作の流れを、土作りから始まり、菊練り、成形（轆轤）、可飾（彫り、化粧、掻き落とし）、施釉、焼成、転写の流れを、複数の写真を交えて順に説明しています。

最後に、陶と幾何学文様の美に対する、私なりの今後の課題と展望についてを結びとしました。